

## 日本語学校にも必要な心の教育 最初の授業で心の成長を説こう

### ◆念願の日本語教育推進法案が可決成立

超党派の日本語教育推進議員連盟（会長・河村建夫/元官房長官）が作成した議員立法の日本語教育推進法案が、さる 6 月 21 日、参議院本会議で全党一致の賛成で可決成立した。待望された、日本語教育に関する初の法律である。

政府は入管難民法案を改正し、外国人労働者の受け入れ拡大に踏み切った。日本語教育推進法は、こうした状況を受けた「共生社会」の構築に向けて、外国人の日本語力の向上にはなくてはならぬ重要な役割を負っている。今後、文部科学省を中心として練られる同法成立を受けての具体策が注目されるどころだ。

加盟 180 校を超えた全国日本語学校連盟（JaLSA）としても、この新しい事態に全面的に協力していく方針だ。なぜなら、真の「共生社会」の構築には、ボランティアによる日本語教育では限界があり、日本語学校の活用が不可欠だからだ。同時に、夜間中学制度の充実・活用も欠かせないだろう。JaLSA は「日本語教育の質の向上」に向けて、さらに努力を傾けてゆきたい。

### ◆「鉄は熱いうちに打て」——勉強嫌いな子の実力を伸ばす木村塾

ところで日本語学校は、入学機会が普通の高등학교より多い。大体、4 月入学（1 年または 2 年留学）、7 月入学（1 年 9 カ月留学）、10 月入学（1 年半留学）、1 月入学（1 年 3 カ月留学）の年 4 回、留学生の募集を行っている。新入生を迎える機会がそれだけ多いが、おしなべて授業の全課程は春先に終了し、卒業式を迎えられるようになっている。それだけに、「鉄は熱いうちに打て」という諺があるように、入学時期はいつであれ新入生を迎える最初の授業が肝心であることは、日本人も外国の人も変わりはないだろう。

そこで、これは日本語学校ではないが、何かの参考になりそうなので、高校・大学入学を目指す中学生や高校生を鍛えている、ある進学塾のことを紹介したい。もっとも関西の先生はとっくに知っておられる方が多いと思うが、我慢して耳ならぬ目を注いでいただきたい。それは、月刊誌『PHP』8 月号に載った記事「ヒューマン・ドキュメント 勉強の前にまず生き方を教える」（辻由美子さん取材）に登場する、兵庫県の「木村塾」のことである。「絶対に生徒を見捨てない塾ができました」が、創業して最初の新聞広告のキャッチフレーズで、今も全国から見学が絶えないという。

「木村塾」は尼崎を拠点に伊丹市、西宮市、池田市など大阪府との県境に教室を開き、小・中・高校生までを対象に教えている。教室数 31、生徒数約 7100 人を擁する地域有数の進学塾だと言われている。辻さんは「この塾のどこがすごいかというと、勉強が嫌いな子を伸ばすのがものすごく得意」と紹介している。

「木村塾」に入ってくる生徒たちの成績は、真ん中かそれより下の子が 8 割も占めているそうだが、尼崎・伊丹の公立トップ校である尼崎稲園高校の合格者の 2 人に 1 人は、木村塾の出身者だという。それだけではない。高等部に目を向けると、入学時に偏差値 40 台だった生徒たちが、東大、京大へ、偏差値 30 台の生徒が、関関同立（関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学）に、毎年当たり前のように合格しているという。

#### ◆「人間教育」、生き方を教える！を第一に掲げて躍進を導く

辻さんは、同塾の創始者の木村吉宏代表にインタビューして、実に色んなことを聞き出している。そこで木村代表が述べた言葉に、現代人が気づかされることは実に多い。

「木村塾は勉強だけを教える塾ではありません。人間教育を第一に行う塾です。勉強も、人間教育も、ではありませんよ。まずは、『生き方を教える塾』です。入学説明会でこう話すと、保護者の方から『変な宗教か』と引いてしまわれる方もおられます」

塾なのに人間教育、いったいどういうことだろうと辻さんは驚いたが、実はこの「人間教育」に「木村塾」の奇跡の秘密が隠されているという。「木村塾」の教室で目についたのは、「人生の勝利の方程式 7 カ条」と書かれた張り紙だった。参考にここに主な内容を掲げておく。

第一条 自分から挨拶する。

第二条 “マイナス発言” は口にしない。

第三条 「お願いします」の気持ちで取り組む。

第四条 自分の能力・可能性に “限界ライン” を引かない。

第五条 高い目標を掲げ、地道な努力をやめない。

第六条 全てのことに感謝の心を持つ。

第七条 他人を喜ばせる、幸せにすることが自分の幸せだと考える。

木村代表は、「とくに重視しているのは第 7 条の『利他の心』なんです。利他とは利己の反対で、人の役に立ちたいという心のことです。利己的な気持ち。自分の利益のために行動していると、いずれ限界がきます。でも利他の気持ちで人のために頑張ろうとすると、人間は信じられない力がでるんです」と語っている。この「利他の心」が、低い偏差値の子をトップクラスの学校に次々合格させる秘密だという。いわば仏教で説く「利他業」「利他の精神」である。

「偏差値 30 の自分でも頑張っって有名校に入れば、他の勉強ができない生徒たちの希望の星になれます。後輩のために頑張ろう、仲間たちと一緒に志望校に入ろうと励まし合う。これが利他です。その結果、奇跡の大逆転ドラマが生まれるんです。木村塾の生徒たちは、自分のためだけではなく、仲間のためにも頑張っています。その力は人生のあらゆる場面で役立つものになります。これを身につけてもらうのが『木村塾』の目的なんです」

木村代表によると、生徒たちだけではなく社員たちも、この「利他の心」を培うことによって見違えるように育っていくという。生徒からのアンケートが最低だったビリ社員は、「7カ条」を自分の生活に徹底することで、人間的に成長し、今では小中学部の部長に昇進しているという。

#### ◆人間の存在の「道・徳・功・力」の四つの根本範疇

ちなみに、松下幸之助さんらが創刊したこの『PHP』は、毎月毎号、悩んでいる人が明るく前向きに生きられるよう、非常に啓発的なエピソードがわかりやすくかつ優しく豊富に紹介されている。日本語学校の書架において、先生方も学生も見られるようにしておくとは非常に参考になることが多く、自己啓発には最適ではないかと思える。朝の授業の冒頭5分に読み上げても、授業に小さな活気を灯しそうだ。

ところで、東洋学の泰斗・安岡正篤先生が『現代活学講話選集1 十八史略(上)』(PHP文庫)の中で、「東洋の道徳について——東洋思想の基本概念」として極めて含蓄のあることを書いている。それによると、東洋道徳は西洋の概念とは違い、もっと根本的・不変的なものであるとして次のように解説している。

人間の存在および生産活動には「道」「徳」「功」「力」の四つの根本範疇がある。ここでは「功」と「力」についての説明は省くが、「道」と「徳」についてはこう言われている。

「道というものは、これあるによって宇宙・人生が存在するのであって、これがなければ宇宙・人生は成り立たないという宇宙・人生の本質的なものをいう。その道が人間に現れて徳というものになる。従って徳というものは、これあるによって人間である。これがなければ形は人間であっても人間ではないという人間存在の本質的・根本的なものをいう。徳はすなわち道から出たわけです」

安岡先生はさらに言葉を継いで、

「道というものは造花である。創造進化の働きである。その道が人間を通じて徳というものになっていった。だから、これあるによって人間である。これがなければ人間ではないという、本質的なものが徳というものでありまして、それに対して、才能、技能、智能というようなものは、大事なものではけれども、これは付属的要

素でありまして、人間であれば多少の才能・技能はもっておる。しかし多少これに乏しくたつて、人間たることに差し支えない。……ところが徳がないというと、これはもう全然人間ではない。例えば明るいとか清潔であるとか、或いは愛するとか、扶けるとか、報いるとか、努めるとかいう、こういう心がなければ、それは人間ではないわけでありまして、宇宙の道に対していうならば、人間は徳であります」

木村先生が大事にしている「利他の心」の源泉のようなものが、道であり、徳である、すなわち「道徳」である。「道徳の源泉が利他の心」と、逆もまた言えそうな相関性だ。

#### ◆五倫五常の道を説き、人間教育が素晴らしかった江戸の教育

こうした考え方は、「明日に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」（『論語』里仁篇）と道を知ることに関心を注いだ江戸時代の教育によく活かされていた。すなわち江戸の人々は、人の進むべき生き方をよく説かれた孔子の教えを、中国以上によく咀嚼して教育に取り入れた。すなわち知識を学ばせることもさりながら、人格の完成を大事にした人づくり教育に比重を置いた。江戸時代は「学問」といえば、四書五経も含めて多くは「人格を磨く教育」を指した。「史書」もまた、人の生き方の参考にされた。

江戸時代の末期になると、塾・寺子屋は全国の主要街道のみならず、庶民が往来する各藩の街道に沿っても張り巡らされた。千葉（安房、上総、下総）、埼玉（武蔵国）には、それぞれ 1000 校前後の塾・寺小屋があった。江戸末期の識字率は武家階級 100%、全国平均では、男性 40～51%、女子は 15～21%にのぼり、当時としては日本の識字率は世界一と見られていた。お坊さん、宮司さん、庄屋さんなど村で尊敬されている者が先生となって専ら人の道を説き、そして習字や古典も教えた。

当時の人の道は「五倫五常の教え」だった。五倫は「君臣の義」「父子の親」「夫婦の別」「長幼の序」「朋友の信」であり、五常はすなわち「仁・義・礼・智・信」だった。当時日本では、寺子屋や塾の先生が亡くなると村の童子たちの親は「筆塚」を建て、いつもそこを綺麗にし、命日には故人を偲ぶ催しを開き、親も子も世話になった師の恩を終生忘れなかったという。

現代では少なくなった、先生を敬する心である。尊敬心。安岡先生は、愛情は人にも動物にもあるが、この「敬う心」が人間と動物の差であるという。つまり人にあつて、動物に無いものだという。敬う心は、翻ってその人に及ばないという「自ら省みて及ばない」という「恥じる心」となり、その心は「参る」という気持ちになった。安岡先生は「参る」の言葉は、「あれは偉い」「尊いという尊敬・讃嘆の言葉です。……精神的 content のある、人間味豊かな言葉であります」と説いている。

これは、信州大学名誉教授で平成国際大学教授の坂本保富先生が指摘していることだが、信州の諏訪の寺子屋の規則を書いた「掟書き」の木の看板には、「手習い読み、人に優れたりとも、かりそめにも慢心を致すべからず、諸々の芸、共に何程上手にても、自慢

する事、道に違ふ故、人是を拒む。芸は末なり、道は本なり。末を以て本を失うことなかれ」(『長野県教育史』第8巻「資料編2」)とあった。

この「芸」は芸事の芸より、もっと広い意味に使い、知識を身につけること一般も含めて芸と捉えた上で、寺子屋の先生も「芸は末、道は本」と、知識を教えることよりも、人を作ることが大事だと知っていたのである。これは「木村塾」の木村先生の教えとピッタリ重なっている。

それほどまでに重要な人づくりの教育を、戦後74間、文部(および文科)省は英語教育だ、ITだと知識習得の必要性を説きながらも、木村代表が語るように「道徳、すなわち心を育てる教育」を軽視してきたのではないだろうか。木村先生の教えは、日本の学生・生徒だけではなく、外国人の留学生にも通用する立派な教えである。

#### ◆「道徳」は洋の東西を問わず大事な言葉

ちなみにこの「道徳」という言葉は、西洋においても、実はほぼ同じ認識で捉えられている。道徳を語源的に調べると、英語で言う「virtue (ヴァーチャー)」は、13-19世紀にかけては薬などの「効力」を指したが、同時に13世紀より「美德、徳、善」を意味し、14世紀よりは「長所、利点」をも示し、17世紀からは女性の「純潔、貞操、貞節」も意味するようになったという。

また、キリスト教では「ヴァーチャー」は、天使の位階の第五位階級にあたる「力(りき)天使」を指す。この天使は「光り輝く者、輝かしき者」として知られ、神の力と恩恵を人々に授けて地上に奇跡を起こす天使とされる。難局にある善人に勇気を与え、鼓舞し、その力を引き出す存在であり、力天使という表記もこれに由来する、と言われているそうだ。

また、「能天使」と共に宇宙の物理法則を保つことも行う役割を持つ。人類にとって初めての出産であるカインの誕生の際に産婆を務めたり、キリストの昇天に付き添ったりしたのも「力天使」とされている。

真野隆也著『Truth In Fantasy 17 天使』(新紀元社、1995年)によれば、「力天使」の名は「高潔」「美德」を意味する。実現象としての奇跡を司り、それをもって英雄に勇気を授けるとされる。

こうした説明の数々は、安岡先生の説く「東洋の道徳」と実は似通っているのはいか、と感じはしないだろうか。洋の東西を問わず、「道徳」は非常に大事な言葉、概念であることは確かだ。

日本語学校は、この度の日本語教育推進法の成立を受けて新たな段階を迎える。外国の人々と日本人の間を繋ぐ橋は「日本語」である。日本語の習得無くして共生社会は望めない。この橋をつなぐ接着剤として、「道徳」という日本を一流の国家ならしめた規範の活用をもっと考えてもよいのではないだろうか。